

(プロローグ サソリのハラワタ)

天に流れる白い帯。星々を引き連れた天の川が、ひとときわ煌びやかな夜のこと。

突如現れた黄金の光が、梨花と沙都子が暮らす防災倉庫をゆらり、ゆらりと包みはじめた。

「り、梨花あ!？ これ、なんですかのッ!？」

「知らないわよ! 私だつてこんなの見たことな……つて、あれ見て、沙都子!!」

驚愕の色を浮かべたまま、梨花が開け放たれた窓を指差す。そこには黄金色した無数の蝶が、ひらひらと踊るように飛び回っていた。

「……ホント、なんなのよ……」

「梨花。また、変なオヤシログッズで遊んでたんじゃございませんわよね……?」

「何よそれ! あんたこそ、またこつそり変な神様にでも会つて来たんじゃないの?」

「失敬な! 私はもう二度と……つて、梨花! あそこに何か浮かんでますわ!」

輝きながら舞う蝶たちの中心に、白い紙のようなものがふわふわと漂っている。

「何……?」

梨花が何気なく手を伸ばすと、白い紙が呼応するかのよう
に高度を下げ、緩やかに彼女へ向かいはじめた。

「ちょっと梨花、触っちゃダメですわ!」

だが、聞いていないのか、聞こえていないのか。

梨花は手を挙げたまま、ぼんやりと蝶たちを見つめている。

「……ッ!!」

梨花の手が紙に触れた刹那、部屋中の光が一斉に彼女へ向かいはじめた。光が光に重なり、輝きが梨花の手の上で圧縮されていく。やがて強烈な光の集合体は金色の塊へ変貌し、稲妻のごとき鋭い閃光を撒き散らした。

「梨花あっ!!」

凶悪な眩しさが二人を襲い、視界を奪う。

真つ白な世界。沙都子は何もない砂漠に迷い込んだような不思議な感覚に囚われた。

だが、それも数秒か、数分か。

再び目を開けるともう黄金の光はどこにもなく、古びた蛍光灯が照らすいつもの部屋があるだけだった。

「まったく、何なんですかの……。梨花、平気です?」

梨花は応えず、心ここにあらずの面持ちのまま自分の手を覗き込んでいる。

手の上には、数枚の便箋。

理屈は分からないが、先ほどの紙が変化したものだろうと沙都子は感覚で理解する。

「……………何か書いてありますの?」

「うん、これ……手紙、つていうか招待状? みたいよ」

「はあ? 招待い? 誰から……つて、考えるまでもないですわね。こんな届け方、あの方たちくらいでしてよ」

呆れたように手のひらを返す沙都子に苦笑しながら、梨花は小さく頷いた。

「多分、正解。文体からして、羽入だと思うけど……」

「何ですか？ またカケラの海に來いって？」

梨花がゆっくりと首を振る。眉間に皺を寄せ、いかにも不機嫌そうだ。

「じゃあ、どこに……」

訝しげな沙都子に小さく微笑んでから、梨花は、はあ、と苦いため息を吐いた。

「……………六軒島よ」